

もう一人 いる

きたゆきこ

真っ暗な彼方から誰かが呼ぶ声が聞こえて、ゆっくりと目を開いてみたが、やはり暗闇が広がるだけだった。

「姫、起きた？」

頭上から声が聞こえ、顔を上げてみた。

「姫、起きた？」

両腕で膝を抱いた格好で座り込む自分を、長い髪の女性が見下ろしているのが、暗闇の中なのに薄っすらと見ることができた。

「姫？」

顔を膝頭の間隙に埋め、目だけを目いっぱい上に向けて、話しかけてくる女性を見つめた。

「姫、もう大丈夫だから。安心しな。」

そう言われても、答えることも、立ち上がることも、歩み寄ることもしたいという気にならなかった。

「姫、もう大丈夫なんだよ。もう、みんな行ったから。」

しばらくその言葉を噛み砕いてみたが、どうしても信用できなかった。

「みんな？」

「そう、みんな行ったよ。あとは、あんたと私だけさ。」

「エミ^{ねえ}姉と、私だけ・・・？」

「そう、私たち、二人だけなんだ。」

思わず、両膝に埋めていた顔を上げていた。

みんな

「だから、姫ももう行こう。私も後から行くよ。心配しないで。」

見下ろすエミの顔には、優しい微笑みが浮かんでいる。姫が好きな笑顔だ。しかし、その笑顔でさえも姫の心の奥底に燦ぶる不安を掻き消すことはできなかった。

「本当に、みんな、行っちゃったの？」

「ああ。み～んな行っちゃったよ。誰も、誰も残ってない。もう、誰もね。」

「光子さんも、将ちゃんも、さっちゃんも、文太くんも、^{るい}瑠衣さんも、鉄彦ちゃんも・・・」

「そう、みんな。」

遮るように、エミが答えた。

「・・・咲ちゃんも？」

そう問いかける姫の不安を察したかのように、エミは先ほどよりも華やかな、満面の笑みで答えた。

「ああ、行っちゃったよ。咲はもういないんだ。だから、もう、大丈夫だよ。」

「・・・^{じん}臣兄さんも・・・？」

聞くと同時に目を伏せた。そんな姫の様子を見て、エミは半歩歩み寄ってきた。そして、目の前にしゃがみ込み、優しく姫の頭を撫でてくれた。

「うん。臣も、もう行ったよ。姫のこと、最後まで気にしてた。一緒に、行きたかったみたいだったよ。」

エミの言葉に胸が締め付けられた。その胸の痛みに押し出されるように、右の頬を涙が一筋流れ落ちる。

行かなきゃ

「臣兄さん・・・どうして、私に直接、一緒に行こうって、言ってくれなかったんだろう。」

エミは一瞬困ったように首を^{かし}傾げたが、すぐにまた優しい微笑みを浮かべた。

「姫、部屋に籠もっちゃって出てこなかっただろ？あいつ、あれ以上留まったら折角固めた決心が鈍っちまいそうだったんだよ。それでも、ギリギリまで、姫が出てくるのを待ってた。本当だよ。嘘じゃない。」

伏せた目を上げると、すぐ近くにエミの顔があった。その目の中に宿る光には、一点の曇りもなかった。

「エミ姉・・・ありがとう。」

エミは俯いて、小さく^{かぶり}頭を振った。

「礼を言われることなんか、私何にも言っちゃいないよ。全部、事実なんだからさ。」

エミが照れを隠す時には、いつも頭を振って表情を見せないようにする癖を知っている姫は、エミの揺れる前髪を見つめながら自然と笑みが口元に浮かんでいた。

「私も、もう、行かないといけないんだね。」

頭を上げたエミの顔には、悲しげな色が浮かんでいる。

「ああ。そうだね・・・」

「エミ姉には、ずっと、お世話になりっ放しだね。初めて会った時から、ずっと・・・」

「そんなこと、気にすんなよ。」

そう言いながら、エミは姫の前に^{あぐら}胡坐をかいて座った。

「エミ姉は、私の、憧れだったの。綺麗で、賢くて、強くて、スタイルも良くて、面倒見もよくて・・・最初から、みんなに頼りにされてたよね。」

昔を懐かしむように目を細め、エミの靴先を見つめながら呟いた。

「別にそんなに褒めてもらうようなところ、私にはないよ。男勝りでがさつだしさ、私。その点、姫なんかはさ、大人しくて、小さくて、可愛くて、私、好きだったよ。女の子っぽいところ、羨ましかった。」

今度は姫が、幾分か強めに頭を振った。

「私は・・・嫌な事があっても、何も、言えなくて、怯えて、我慢するばかりで・・・何も解決できなかったもの。咲ちゃんに虐められた時も、いつも、エミ姉が、助けてくれた。」

言いながら大粒の涙が次から次へと流れ落ち、膝を抱えた腕に小さな水溜りをいくつも作った。

「姫・・・嫌な事、思い出しちゃったね。もう、全部忘れていいんだよ。あの、クソババア共のことも、アホなクラスメイト達のことも、全部、ぜ～んぶ、忘れていいんだ！ね？」

「うん。私、もう行くんだものね。全部、忘れられるよね・・・」

相変わらず流れ続ける涙を拭う事もせず、エミの言葉に心を委ねた。

「ずっと一人で、大変だったね・・・よく、我慢したね・・・姫は、本当に強くて、良い子だよ。」

「喜美ちゃんは？」

唐突な質問に、エミは一瞬固まってしまい、答えに詰まった。

「え？喜美ちゃんて、喜美子のこと？」

エミの靴先を見つめたまま、姫は小さく頷いた。

「・・・どうして、そんなこと聞くのさ？」

「喜美ちゃん、戻って来れるのかな・・・？」

みるみるうちにエミの表情が陰しくなっていくことに、靴先を見つめたままの姫は気がつかなかった。

「さあ、どうだろう・・・それは、私にも分かんないよ。正直、喜美子のことは、私、どうでもいいし。」

姫は驚いたように顔を上げた。そして、その目に飛び込んできたエミの表情に、思わず息を呑んだ。

「エミ姉、どうして、そんなこと、言うの？喜美ちゃん、可哀相だよ・・・」

「可哀相？あいつが？なんで？」

エミの目は大きく見開かれ、姫を射抜くような恐ろしさが宿っていた。

「エ、エミ姉？」

自分の知っているエミではないことに気がつき、姫は大いに動揺した。

「あいつなんかの、どこか可哀相なのよ。あいつ、私たちに全部押し付けて、とつととどっか行っちゃったんだよ？特に、姫は痛いのか怖いのとか、全部押し付けられたじゃんか！」

「で、でも、喜美ちゃん一人では、耐えられなかったのよ、きっと。」

「だからって、何も可哀相なもんか！一人で逃げ出したあいつが、可哀相なもんか！」

いきなり立ち上がり、髪を振り乱して叫びだしたエミを、ただただ黙って見上げるしか、姫にはできなかった。そして、その時初めてエミの苦しみと痛みと悲しみを知った。

「エミ姉・・・エミ姉も、誰かに、何か、されたの・・・？」

姫の言葉に、エミの顔が一瞬真っ青に、すぐに真っ赤に変わった。

「そう、だったの・・・ごめんね、エミ姉・・・私、頼ってばかりでエミ姉のこと、エミ姉の痛みとか苦しみを、聞いてあげようと、しなかった・・・」

消えない痛み

「ジ、ジジイ・・・クソジジイが、私を・・・」

ブルブルと震えるエミの拳を見ると、指の間から血が滴り落ちていた。

「虐めた。コソコソと、でも聞こえるように、豚だの、相撲取りだの、罵った。ま、まるで、自分よりも下等な生き物を見るような目で、見てきやがった・・・私が、雨の中階段で滑って尻餅ついたとき、あいつ、ジジイ、馬鹿笑いしやがった。助けもしない、心配もしない、ただただ、家の中から、指差して笑って馬鹿にしてやがった！あいつ、酒に酔って、一晩中怒鳴ってきたこともあった。馬鹿、馬鹿、馬鹿がって、ずっと。布団を頭から被っても、ずっと聞こえてきた。すれ違うとき、ブーブーって、豚の鳴きまねして・・・ちくしょう！娘に、実の娘に、そんなこと、そんな、心を傷つけるようなこと、なんでできんだよ！クソが！」

「エミ姉・・・」

「それだけじゃない。まだ小三くらいの時、ある日、目が覚めたら、パジャ、パジャマの上だけが、脱げてたことが、あったんだよ。全部ちゃんと脱げてたわけじゃ、ないんだ。前は全部開いてて、肩も胸も、お腹も全部出てて、手首だけは脱げてなくて、まるで、まるで誰かが、脱がしたみたいなの・・・布団も、被ってなかった。何があったのか、全然、私全然、何も覚えてない。でも、でも・・・」

エミの目からも、いつの間にか滝のように涙が流れ落ちていた。

「でも、エミ姉。エミ姉も、全部忘れられるよ。ね？一緒に、行こうよ。エミ姉・・・あとは、後は全部、喜美ちゃんに・・・」

エミの手を握ろうと必死の思いで伸ばした姫の右手は、高電圧に触れたかのように弾かれた。

「・・・ごめんね、姫。悪いけど、先に行つといてよ。」

姫の手を振り払った手を上げたまま、大きく肩で息をするエミを、姫は呆然と見つめるしかできなかった。

「エミ姉・・・」

先に行くね

「お願いだから、先に行って。」

「エミ姉、本当に、後から、来てくれる？」

姫のすぎるような視線にぶち当たり、エミの体から、少しだけ力が抜けた。

「うん、大丈夫。後から必ず行くよ。ごめん、心配掛けて・・・」

いつもの優しい笑顔を取り戻しつつあるエミを見て、姫もほんの少し笑顔になった。そして、改めてエミの手を握り、立ち上がった。エミよりも頭一つ半くらい小さな姫は、エミを見上げて満面の笑みを浮かべた。

「今まで、本当にありがとう。先に行くね、エミ姉。」

「うん。」

「エミ姉、また、会えるよね？」

「・・・うん。うん、もちろんだよ。すぐに、また会える。姫と私と、みんなとも、臣とも、すぐにまた会えるよ。」

「そうだよね、うん・・・じゃあ、またね。エミ姉。」

「さよなら、姫。」

「さよなら・・・」

次の瞬間、エミの手を包んでいたぬくもりが消えた。目の前に広がる真っ暗闇を、エミは見つめ続けていたが、やがて静かに目を閉じた。

私の名前は・・・

「あ、気がつきましたか？」

再び目を開けると、薄い頭の眼鏡の男性が覗き込んでいた。部屋に微かに漂う鼻を突く匂いが、ぼんやりとした頭にハツカのように染み渡る。

「佐伯、先生・・・」

「おお、気がつきましたね。私が分かりますかな？良かった良かった。どうです？大丈夫ですか？」

にこりと笑うと、丸い顔が益々真ん丸くなった。そんな佐伯を面白いと思いながら見つめていたが、それにも飽きて、目だけで辺りを見回してみた。白、白、白。壁もカーテンも、濁った白しか目に入らない。その濁った白さえも、さっきまでの暗闇との対照によりキラキラと輝いて見えることが、エミには気に入らなかった。

「ここがどこだか、覚えていらっしゃるでしょうか？田中さん。」

「田中・・・」

ぼんやりと呟く声に、佐伯は身を乗り出してきた。

「ご自分のお名前、言えますか？」

再び丸い顔に目をやると、先ほどの笑顔が消え、代わりにピンと張り詰めた緊張が張り付いていた。

「名前・・・」

「そうです。あなたの名前ですよ。言えますか？」

「私は・・・」

佐伯がごくりと息を呑む音が、エミの耳にも届いた。

「私は、喜美子です。田中喜美子・・・」

その瞬間、佐伯の顔中に安堵の色が広がった。

「そう！田中喜美子さん。あなたは、田中喜美子さんですよ。」

「私、なんだか頭がぼ～っとして・・・私、ずっと寝ていたんですか？」

「ううん、そうですね。確かに田中喜美子さんはずっと寝ていらしたんですが、実際は寝てはいなかったんですよ。」

「はい？」

エミはわざとらしく、聞き返した。

「えっと、つまりですね、まず、ここは病院です。精神科のね。で、田中喜美子さん、あなたは『解離性同一障害』、つまり、多重人格障害で、入院されているんですよ。」

「多重、人格？私が。」

エミは、少々大袈裟かと思ったが、両手を口に当てて、驚いたという演技をしてみせた。

「そう、そうなんです。信じられないかもしれませんが、本当のことなんです。あなたには、少なくとも五人の人格が存在していたんですよ。」

「五人・・・」

他の八人は、どうやら見つからなかったらしいなどと思いながら、目の前で一生懸命に話す医師の無能さを、内心で笑った。

「他の人格が出ている間、本物のあなた、つまり田中喜美子さんですね。本物のあなたは、ずっと眠っている状態だったんです。しかし、その間にも、他の人格があなたの体を動かし、生活していたんですよ。」

消えた人々

「そう、だったんですか・・・」

「ええ。でもですね、その人格の中の一人が、他の人格を説得してくれたんですよ。結果、一人ずつ消えていきまして、今、最後の人格、“姫”が消えたんです。それと一緒に、エミもね。」

「姫？エミ？」

またもやとぼけてみせた。

「ええ。全ての痛みや苦しみを背負っていた姫は、奥深くに閉じこもって中々接触できなかったんですが、やっとのこと、説得することができたみたいです。最後の一人と一緒に、エミも行くと言っていましたから、それで喜美子さん、あなたが戻ってこられたというわけです。」

「そうですか・・・」

「もうしばらく様子を見て、大丈夫そうであれば、退院できますよ。」

例の真ん丸い笑顔の佐伯医師を見つめながら、エミは微笑んだ。

「じゃあ、退院すれば、家族にも会えますよね？」

佐伯医師はちょっと驚いたように目を見開いたが、すぐに真丸の笑顔に戻った。

「もちろんですよ。こちらから連絡しておきますからね。お見舞いにも来てもらいましょう。」

佐伯の言葉で、この場に家族が誰一人として来ていないことを確信したエミは、小さく息を吐いて静かに目を閉じた。

「あ、いや。ご家族皆さんね、お仕事がお忙しいみたいで・・・でも、喜美子さんのこと、とても心配してしまして・・・」

慌てたようにまくし立てるのを遮るかのように、エミが口を開いた。

消えない痛みを消すために

「いいんです。見舞いはいいんです。来てもらわなくても。」

「え？」

ゆっくりと目を開けるエミ、喜美子の顔を見つめる佐伯医師は、戸惑ったような表情を浮かべている。自分の治療は果たして本当に効いているのだろうか。そんな疑問が佐伯医師の顔中に広がるのを、エミは見逃さなかった。

「いいんです。私、自分から会いに行きますから、皆に。これからは、もっと強くならなくちゃいけないから・・・。」

口元に弱々しい微笑みを浮かべながら、佐伯に聞こえるか聞こえないかくらいにぼつりと呟いてみせた。まるで、自分自身に言い聞かせているように。

「きっと、私の心が弱かったから、他の人格を生んでしまったんです・・・だから、強く、ならなきゃ・・・」

涙と一緒に、何か強い意志のようなものが宿ったエミの目を見た佐伯は、安心したように一息吐いた。しかし、佐伯はその涙と意志の本当の意味までを見抜く事は、できなかった。きっと、誰にもできなかっただろう。

「ああ、なるほど・・・そうですか。いや、でもね、別にあなたが弱いわけじゃないんですよ。そんな風に自分を責めてはいけない。ね？これは、誰にでも起こりうる病気なんですから。でもまあ、ご自分から何かをやるということは、これはとても良いことだと思いますよ。何かね、気がかりなことや、困ったことがあったら、何でも相談してくださいね！」

そう言い残し、あの真ん丸の笑顔に、では、と一言添えて病室を出て行った。一人になり、真っ白な天井を見つめるエミの脳裏に、真っ暗闇の中にぼつんと浮かぶ、固く閉ざされた重苦しい、鉄のドアが浮かんた。その奥では、喜美子が未だに深い眠りに就いている。そして、そのドアからはすでに、ドアノブが消え去っていた。

ゆっくりと腕を上げると、自分の血に染まった掌が、濁った白い布団から現れた。その手をじっと見つめながら、エミは誓いを立てた。

「姫、^{かたき}敵、取ってあげるからね。私と姫の敵を・・・そしたら、私も行くからね・・・だから、もう少しだけ、待っていて・・・」

もう一人いる

<http://p.booklog.jp/book/52700>

著者 : kita-yukiko-0727

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kita-yukiko-0727/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52700>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52700>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ